

徳元財は末あり

徳積めば金は自由に

糸より糸と糸

法親



# はし が き

昭和五十年八月十日。春の彼岸会の布教を終えてから、身体の調子が悪いので松隈先生の診察を受けたら、「脳軟化症、老衰、低血圧ですから、安静にしてください。隔日に注射に来ましょう」ということでした。百日余りを経過して、ようやく気力も増し、爽快になり、安静にしているのが勿体ないというような気持ちになってきた。家族のものも、「じっと休んでおられては寂しいでしょう、何か趣味があるとよいのに……」と言いますから、「一も布教、二も布教、三も説教、四も講話で親さまと一体に生活をさして頂いたのに、何の寂しいことがあるものかい。朝から晩までお念仏ではないか、十方法界が揺らいでいるのではないか、恒沙の諸仏は称揚し、釈尊も聖人も、共にお念仏していただくさるではないか、天地万物がみな念仏に唱和していただくさるのだから、何の苦痛もなく屈託もなく、尊いお慈悲に生かされていることを

喜んでゐるよ。」

一一のはなのなかよりは 三十六百千億の

光明こうみやうでらしてほがらかに いたらぬ所ところはさらになし。

一一のはなのなかよりは 三十六百千億ひやくせんおくの

仏身ぶつしんも光ひかりもひとしくて 相好金山そうごうこんせんのごとくなり。

相好そうごうごとに百千ひやくせんの 光ひかりを十方じゅうじつに放ちてぞ

つねに妙法みょうぼうときひろめ 衆生しゆじやうを仏道ぶつだうにいらしむる。

尊とうといではないか、勿体もったいないではないか、信仰しんじやうの尊とうとさは如来にょらいの心光しんこうが常に輝かがやいている

のだよ。

「そんなものですか。」今現在いまげんざいで感謝かんしゃ法悦ほうえつの生活せいかつができなれば、その信仰しんじやうは贗物にせもの

なのだ。何十年なんねん聞きかされても、機こころを見ればどうも行いけそうにないと不安ふあんが出るのは、

仏心ぶつしんと凡心ぼんしんとが一体たいになつてはいないのだ、ピントが狂くるうているのだ、撮取せつとされてはい

ないのだ、法の尊さを眺めて機が法に調子を合わしている機法合体の信仰なのだ。「墮ちる者をお助け」と言葉のうえには傷はないけれども、法も絶対が出ておらず、機も絶対が出ておらず、お言葉の真似をしているに過ぎないのだ。久遠劫から流転している実機は出ておらず、本心実機、流転の根本の機を包んで、素直な真似をして法に調子を合わしているのだから、二種深心になっていないのです。

信仰の根本、親子の名乗りのあがる根本は、信機信法二種深心の徹底することでしょう、一体になることでしょう、仏智が満入することでしょう。蓋のある器にいくら水を注いでも、満水することはありますまい。この機に用事はない、助かっていることを喜べ、と極重の悪人が素直な真似をして死後を喜んでいいますから、信仰の規定の二種深心の定規に外れているのですから、感謝法悦のないのが当然です。

調熟の光明に照らされ抜いたときには、三千世界の絶対の悪性が照らし出されるのです。それを無条件で摂取してくださったときには、十方法界の功德を全領したので

すから、煩惱の動いているところは仏智の動いているところですから、慶ばない通しが慶び通しの生活で、感謝法悦限りない慶喜が動いています。

「大悲の願船に乗じて光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かに衆禍の波転ず、即ち無明の闇を破し、速に無量光明土に到って大般涅槃を証し普賢の徳に遵ふなり」。

と仰せられてあるが、大悲の願船に乗りましたか、光明の広海に浮かびましたか。大悲の願船とは、絶対他力の第十八願を船に喩えて、船に乗りさえすれば、この苦惱の人世が希望に満ち、感謝法悦の生活ができるというのですよ。乗るとは任す、信ずる、開発する、信順無疑する、仏凡一体になる、仏智が満入すれば、「難思の弘誓は難度海を度する大船」ともいわれて、若不生者のお誓いは生死の苦海を渡してください。大船ともいわれてありますが、乗りましたか、任しましたか、その通りの感謝法悦の生活ができないとすれば、聖人の信仰の定規とズレがあるのですから、どこかピントが狂うているから信仰が贗物ですよ。信仰が真似であり、贗物であり、合点であ

り、如実ほんものの信しんでないとするれば、生死しよじの苦海くかいに沈しずんでゐるから汐しおを飲のみ、もがき苦しくるみ流転るてんをしなければなりません。

どこに狂くるいがあるか、一致ちしないところがあるかといえ、二種しゆじん深しん心が徹底てつていしていなければ不ふ如じつの心しんですから真似まねであり、なるほど感情かんじやうが合点がってんした信しんですから、機き法ほう合体がたいの曖昧あいまいな信しんですから慶よろこびが出でないのです。如実じつの信しんなれば、絶对ぜつたいの機きが絶对ぜつたいの法ほうに照てらし出だされて二種しゆ一具いぐになつた機法きほう一たいの信しん仰たうだから、大慶喜だいきよきの生活せいかつになるのです。

聖典せいてんに書かいてあることを、なるほどと感かんじたのは、書かいてあるのですから自じ分の信しん仰たうではありません。実地じつちに体験たいけんした人ひとが本願ほんがんの船ふねに乗のつたから、この人世じんせいが光こう明めいの広こう海かいとなり、希望きぼうに満みちた生活せいかつになるのですから、すべてのものに感かん謝しゃができるのです。そうならない人ひとは不ふ如じつの信しんですから、生死しよじの苦海くかいに沈しずんで、来くる日ひも来くる日ひもがいてゐるのです。

「至徳の風静かに衆禍の波転ず」とは、聖人さまは二種深心が徹底した人を金剛の真心を獲得した人として、必ず現生に十種の益をうる、といわれておりますが、そのなかの第二番目に至徳具足の益、名号を誦得すれば、仏凡一体になれば十方法界の功得を全領しているから、欠目のない完全の徳を信受している。第三番目に転悪成善の益、名号で満腹しているから、この人生の不幸災難欠陥ぐらひは物の数でないから、ご恩を悦ぶ種にして心の向きを変える力を得ている。換言すれば、順境でよし逆境でよし、順風に帆を挙げて生活することができなのです。

「即ち無明の闇を破し」とは、即ちとは同時に、何時と同時にかといえば、大悲の願船に乗ったと同時に、聞き得た信の当体に無明の闇が晴れるのです。無明とは、疑いの無明です。私は疑うてはいないと思われましようが、疑うたことのない人は、晴れた世界を知らないのです。「無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり」と聖人は仰せられてありますが、信仰を熱心に求道した人でなければ、疑いがどんな心かわからな

いのです。二種深心が徹底したときに、疑無明が晴れるのです。そのときを信樂開發ともいい、大悲の願船に乗ったといふのです。乗った人が、至徳具足の益、転悪成善の益を得るから、順境でよし、逆境でよしの神通自在の生活ができるのです。それができないのは、信仰が贗物なのです。

「速に無量光明土に到って大般涅槃を証し」とは、肉体の話はしていませんの、心眼を開かしていただいたときが、心の自力ができて他力不思議に生かされたのですから、本願や行者、行者や本願で、心が神通自在で大般涅槃の徳をいただいたのです、仏智が満入したのです。そのときが、娑婆のおわり臨終を体験したのです。それから心の還相廻向のお手伝いをさしていただくのを「普賢の徳に遵ふなり」と仰せられたのです。

だから静かに考えましようや、如実の信仰、即ち二種深心が徹底した人は、大悲の願船に乗していただいているのだから汐を飲む心配がなく、四方の景色を眺めつつ、家



庭和楽の生活をさしていたから、順境のときは仏祖の鴻恩、祖先の之恩を感謝し、逆境のときは、蒔いた種の恥ずかしさを懺悔して生活しているから不足がない、不平不満がないから業苦が楽な大自然の恩寵を讃えつつ合掌の日暮らしができるけれども、不如実の信であるならば、二種深心が徹底していないのは、本人は贖物とも真似とも合点とも気がつかず、本当の信仰と思っているけれども、業が業と見え、苦が苦と見えて苦しんでいる間は、この世から自業苦ですよ。信仰を聞かされながら、墮ちる者をお助けと信じておりながら助かっていないから、無明の闇の中で生死の苦海に沈んで汐を飲んでいるから、不平や不満が充満し、悪戦苦闘で呪い合いの生活をしているのは、信仰が聖人の信仰に合わない贖物の証拠ではありませんか。信仰の効能が顕われないのは、煩惱があるからではありませんよ、煩惱が救われていない、仏凡一体になっていない、二種深心が徹底していませんからですよ。死んでからのお助けしか聞いていないのですから平生業成、心命終、不体失往生、現生不退、摂取

不捨の聖人さまの信仰まで到達していないのですよ。二種深心が合点か、体験かの小さな原因が、一生涯が自業苦か業苦楽かの大きな結果を描きだすのですよ。



第二十八集が終わるまでは頑張らなければと心に決め、一年前脳軟化症をやっている、この世の記憶は直ぐに忘れるのに、信仰のことを書き始めると頭が冴えて、聖典のご文などもするする出るので、第二十八集の『八万の法蔵は聞の一字に摂まる』までは完成しなければと、一日に何回寝たり起きたりしたことか。左眼は十年前から青ソコヒで失明、右眼の白ソコヒが手術の時期に来ているけれども、頭の狂わないう間に、失明しない間に、それまで生命を与えていたのだと念じつつ書き上げたのです。三月の彼岸会から八月のお盆まで休養さしていたので、昨今では皆さまのお蔭や念力で、静養するのはそのくらいにしろ、もう一度立ち上がって真仮の水際を書いたらどうだ、人の知られない秘密の真髓を、末代まで形見に残してあげたら

どうだ、という心境になりました。



今度はどんな体裁で書かしていただくか、第一章は法の真実、第二章は機の真実、第三章は機法一体の生活。お聖教を拝読して、法の尊さを眺めて有り難がって、理屈がわかって感情の涙の流れるのを信仰と思い、実機の見えるのを間違ひと思ひ、それを包んで出さないのを無我の信仰のように思ひ、如何に説明すれば他力の信仰のように説明ができるか、と苦心しておられるが、肝腎要の二種深心が曖昧なので、信仰が観念の遊戯に終わり、机上の空論で終わり、博覽強記、お聖教に書いてあることを読んで慶んでおられるので、自分の下劣の悪性に親の念力が届いていないのだから、空砲だから、実地の求道するものには響かない。聞いて知って覚えた程度の信仰だから、深刻さが無い。実地の求道した人なら、真仮の水際を語らずにはいられないのだ。いくら博覽強記でも、二種深心が徹底していなければ、信前信後の水際は語

れないのだ。法の真仮を語るのは觀念の遊戯であり、机上の空論である。機の真仮を語るのには、二種深心が徹底したか、せぬかで分別するのである。



信仰は誰でも、自分は素直に聞かしていただいているから、贗物と思っている人はいないのだ。自分のは本当だ、本当だと思いつつ果遂の誓いのうえを前進しつつ、方便から真実に移っているのです。真実の法を、なるほど、なるほどと合点しているのが、真実の機に真実の法を受け取ろうと理解しつつ前進しているので、方便を方便と知らない間は、真実に入っていないのです。法を眺めているのは機法合体で、仏智が満入して機法一体になったときに、今まで方便を方便とも知らずに、腰を据えて危い芸当をしていたものだと思われ、広大の世界を諦得するのです。だから聖人は、「真仮を知らざるによりて如来広大の恩徳を迷失する」といわれ、方便と真実との水際を知らなかったら、こんな広大な恩徳を知らなかったのに、二種深心が徹

底ていして丸まる他力たうりきになつてみれば、不可ふか称しやう不可ふか説せつ不可ふか思議しぎの大慶喜だいきやうきの世界せかいが恵めぐまれて、この人世じんせいが慶喜きやうき法悦ほうえつの生活せいかつになれたことがありがたいのです。

◎

◎

阿彌陀仏あみだぶつの本願ほんがんのうえに、真実しんじつと方便ほうべんとがある。第十八願だいいちはちがんの他力たうりきのなかの他力たうりきの真実しんじつに帰入きにゅうするには、第十九願だいいちじゅうがんの自力じりきのなかの自力じりきの方便ほうべんから、第二十願だいいちじゅうがんの他力たうりきのなかの自力じりきの半自力はんじりき半他力はんたうりきで養育よういくされて、第十八願だいいちはちがんの絶対他力ぜつたいたうりきに入はいれと真仮しんげの分齊ぶんさいを分明ぶんめいにし。

◎

◎

釈尊しやくそんは阿彌陀仏あみだぶつの本意ほんいを承受しやうじゆして、第十八願だいいちはちがんを『大無量寿經だいむりやうじゆきやう』に開説かいてつして法の真実しんじつを顕あらわし、第十九願だいいちじゅうがんを『観無量寿經かんむりやうじゆきやう』に開説かいてつして、機きの真実しんじつを説とき、第二十願だいいちじゅうがんを『阿彌陀經あみだきやう』に開説かいてつして、機法合説きほうがっせつを説といて、合点がってんより体験たいけんに、方便ほうべんより真実しんじつへ誘導ゆうどうしよとされるのが釈尊しやくそんの真意しんいである。

善導大師は、信仰を諦得する規定を示して二種深心と教えてありますが、型を覚え  
たのは方便であって、文字の裏に溢れている仏智の不思議を体験したのが真実であ  
る。誰でも話がわかり、感情が涙を流し、法に調子が合えば、他力廻向の信仰のよ  
うに思いますが、その皮相の信仰からだんだん逆勝の心まで浸透して実地の求道とな  
り、遂に仏凡一体、機法一体の無我の信仰まで誘導していただくのです。言葉でな  
れば導かれない、言葉を離れなければ不思議の仏智は頭われないのです。

聖人は信仰のうえに沢山の特徴があります。特徴のなかの特徴が、真仮の分齊を  
明瞭にされたことであります。みな方便から真実に誘導するように『和讃』でも、  
念仏成仏これ真宗  
万行諸善これ仮門  
権実真仮をわかずして  
自然の浄土をえぞしらぬ。

聖道権化の方便に

衆生ひさしくとどまりて

諸有に流転の身とぞなる

悲願の一乗帰命せよ。

定散諸機各別の

自力の三心ひるがえし

如来利他の信心に

通入せんとねがふべし。

『二巻鈔』には、「ひそかに觀經の三心往生を按ずれば、これすなわち諸機自力各別の三心なり、大經の三信に帰せんがためなり。」

また唯円房の書かれたという『歎異鈔』には、「おほよそ聖教には真実権仮ともにあひまじはりさふらふなり、権をすてて実をとり、仮をさしおきて真をもちいるこそ、聖人の御本意にてはさふらえ。」

◎ ◎  
お聖教を自分の信仰の程度程度で味わっているのだから、みな自分のが本当であるけれども、法のお育てを蒙り、深刻に求道すればするほど機の醜さが知らされ、それが

仏凡<sup>ぶつほん</sup>一体<sup>たい</sup>にさしていただくまでには「微塵劫<sup>みじんこう</sup>を超過<sup>ちようか</sup>すれども仏<sup>ぶつ</sup>の願力<sup>がんりき</sup>には帰<sup>き</sup>し難<sup>がた</sup>く大<sup>だい</sup>信海<sup>しんかい</sup>には入り難<sup>がた</sup>し」と聖人<sup>しょうにん</sup>さまを悲歎<sup>ひたん</sup>せしめたのも無理<sup>むり</sup>はありません。阿彌陀<sup>あみだ</sup>さまに正覚<sup>しょうがく</sup>を取<sup>と</sup>らして已来<sup>このかた</sup>、十劫<sup>じゅうたつ</sup>立たしても、お釈迦<sup>しやくか</sup>さまに、八千遍<sup>せんぱん</sup>のご苦勞<sup>くろう</sup>をかけても、聖人<sup>しょうにん</sup>さまに寄<sup>よ</sup>せかけ寄<sup>よ</sup>せかけ無駄骨折<sup>むだぼねお</sup>らしても、自分<sup>じぶん</sup>は素直<sup>すなお</sup>に聞<sup>き</sup>いたと自惚<sup>うめぼ</sup>れて、十<sup>じゅう</sup>八願<sup>はつがん</sup>の相手<sup>あいて</sup>の逆謗<sup>ぎやくぼう</sup>の屍<sup>しかばね</sup>が頭<sup>あたま</sup>を挙<sup>あ</sup>げないのだから、仏凡<sup>ぶつほん</sup>一体<sup>たい</sup>になることは難中<sup>なんちゆう</sup>の難<sup>なん</sup>であり、仏智<sup>ぶつち</sup>が満入<sup>まんにゅう</sup>することは極難<sup>ごくなん</sup>の信<sup>しん</sup>であるけれども、法龍<sup>ほうりゆう</sup>はやり抜<sup>ぬ</sup>くぞ。

◎

◎

第一章<sup>だいいちしやう</sup>と第二章<sup>だいにしやう</sup>とは、専門語<sup>せんもんご</sup>が多く難<sup>むづか</sup>しかったら、第三章<sup>だいていしやう</sup>から読<sup>よ</sup>んでください、家庭<sup>かてい</sup>も面白<sup>おもしろ</sup>いです。そして第一章<sup>だいいちしやう</sup>にもどつてくると、よくわかります。

以上<sup>いじょう</sup>